

BORDERLANDS

EVENT / PERFORMANCE

展覧会会期

令和3年12月22日(水)、23日(木)
11時~19時 (最終日は17時クローズ)

会場

BankART KAIKO
(横浜市中区北仲通 5-57-2)

参加メンバー

村田峰紀、前田穰、たくみちゃん、濱田明李、
瀬藤朋(舞台芸術制作者)、渋谷まろん(批評家)、
牧田義也(歴史家)、武谷大介

入場料

1,500円(2日間+オープニング共通券) /
ワークショップ参加者 +1,000円

お問い合わせ先

080-6535-3615 (武谷)
daisuketakeya@gmail.com

会場

BankART KAIKO
〒231-0003 横浜市中区北仲通 5-57-2
KITANAKA BRICK & WHITE 1F

みなとみらい線「馬車道」駅、2a出口の
エスカレーターをあがって、右手手前の赤煉瓦の建物
KITANAKA BRICK & WHITE Northにお入りください。



オープニングイベント

12月21日(火)
グループパフォーマンス+オープニング
19:00-21:00

パフォーマンスタイムテーブル

12月22日(水)
ソロパフォーマンス
15:00-18:00

12月23日(木)
ソロパフォーマンス+ワークショップ
13:00-17:00

詳細は特設ホームページ
(<http://borderlands.responding.jp/>)にて

「聖水」の「販売」(5,000円)

霧ヶ峰山麓から湧き出る「聖水」には歴史の力が浸透しています。先史時代から現代に至るまで、諏訪周辺地域ではこの「聖水」をめぐる数多くの行為=パフォーマンスが引き起こされてきました。会場では、「聖水」にまつわる行為の歴史的な連鎖に加わる参加者を募集します。

1949年10月31日、東京・後楽園で開催されていた第4回国民体育大会の自転車競技会場に、松明を掲げた一団が到着しました。松明は、長野県・八島湿原近傍の旧御射山神社で採火され、徒歩と自転車によって3日間かけて諏訪から東京まで運ばれてきたのです。本作品は、敗戦後まもない日本において遂行されたこの「聖火リレー」に着想を得た集団パフォーマンスです。諏訪の信仰世界に深く根差した「聖火」は、占領統治下で「競い火」と名前を変え、検閲等、幾多の困難を乗り越えて東京へと運ばれました。本作品は、戦後占領期に固有な意味が込められたこの「聖火リレー」を、御射山の水源信仰と結びつけて「聖水リレー」へと読み替えることで、翻って現代社会における人間の連帯と調和の新たなかたちを模索します。

(文責：牧田義也)

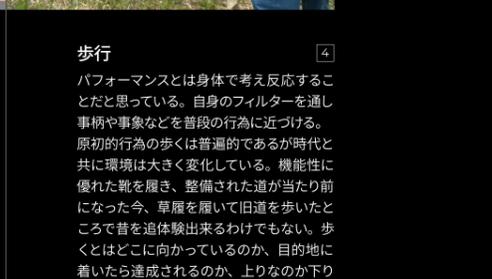
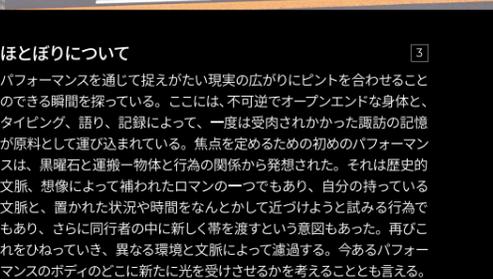
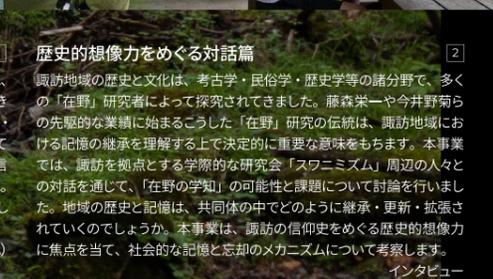
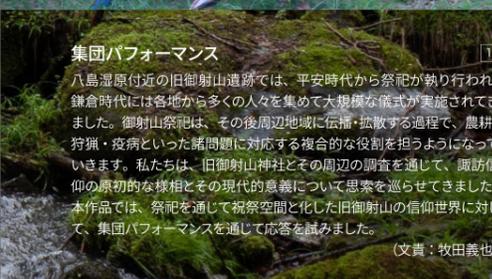
CONCEPT

R3 Scape-Cityは、諏訪盆地の自然・歴史・文化に焦点をあて、現代社会の諸問題に回答する芸術表現の可能性を探究します。日本列島中央部の山岳地帯に位置し、八ヶ岳や霧ヶ峰といった急峻な山々に囲まれた諏訪盆地では、人々が暮らす共同体と自然環境との対話を通じて独特の文化が開かれました。本事業は、共同体の外縁に横たわる境界地帯 (borderlands) の自然環境に着目し、人間の共同体をその「外側」から捉え直すことで、現代社会が直面する諸問題に対して新たな光をあてます。私たちはこの目的のために、旧御射山遺跡や和田峠をはじめとする諏訪盆地周辺で現地調査を実施し、境界地帯における人間と自然の関わりから生じた同地域の思想・文化・精神性について議論を重ね、その成果をパフォーマンス作品として結実させました。村田峰紀は和田峠の旧中山道を辿ることで、「移動」がはらむ困難を身体感覚の次元で問い直しました。また、濱田明李は黒曜石を産出する渓谷において、「運搬」という行為がもつ原初的な意味を考えました。武谷大介は諏訪信仰の伝統的な「儀礼」を手がかりとして、地域に根ざした信仰と霊性の形態を独自の視点で捉え直しました。さらに、たくみちゃんは諏訪大社の背後に広がる森林地帯を舞台に、歴史的な層が幾重にも積み重なった空間に対して「応答」を試みました。そして、前田穰はこうした思想・文化・精神性を未来へと「継承」する方途を模索しました。

諏訪の物語は、山の中では終わりません。諏訪で生まれた思想・文化・精神性は、境界地帯を越えて、さまざまな地域へと伝播していきます。近代になると、諏訪盆地では製糸業が勃興しました。同地域で生産された生糸は、周辺の山々を越えて横浜港へと運ばれ、欧米諸国へと輸出されていきました。諏訪の周辺地域が山の境界地帯であるとするれば、開港都市横浜は、日本と諸外国の狭間で多様な人々が往来する海の国境 / 境界地帯です。本事業は、諏訪と横浜の歴史的なつながりに注目し、山の境界地帯で得られた知見を、海の境界地帯が生み出す国際的な視野に接続することで、現代社会における「狭間の空間」の文化的意義を解き明かしていきます。

(文責：牧田義也)

【Responding: International Performance Art Festival and Meeting】とは？日本発の新しい形式の国際パフォーマンスアート芸術祭。我々を取り巻く現在の社会や環境の課題に身体表現を用いてレスポンド(介入)し、シンポジウムの同時開催により学術的な文脈との相互性も持ちつつ、国際ネットワーク形成の基盤を構築。コロナ禍において世界各地で様々な活動が散見されるパフォーマンスアートの日本国内での社会的普及に寄与すること目的とする。



1 集団パフォーマンス
八島湿原付近の旧御射山遺跡では、平安時代から祭祀が執り行われ、鎌倉時代には各地から多くの人々を集めて大規模な儀式が実施されてきました。御射山祭祀は、その後周辺地域に伝播・拡散する過程で、農耕・狩猟・疫病といった諸問題に対応する複合的な役割を担うようになっていきます。私たちは、旧御射山神社とその周辺の調査を通じて、諏訪信仰の原初的な様相とその現代的意義について思索を巡らせてきました。本作品では、祭祀を通じて祝祭空間と化した旧御射山の信仰世界に対して、集団パフォーマンスを通じて応答を試みました。

(文責：牧田義也)

5 スカートの下に縄文時代
諏訪の茅野で出土した土偶「縄文のビーナス」に代表される縄文時代の女性性は、地球の鼓動と繋がる大きなエネルギーであり、全ての女性のスカートの下にある。その古代の女性性を呼び起こしたい。

前田穰

2 歴史的想像力をめぐる対話篇
諏訪地域の歴史と文化は、考古学・民俗学・歴史学等の諸分野で、多くの「在野」研究者によって探究されてきました。藤森栄一や今井野菊らの先駆的な業績に始まるこうした「在野」研究の伝統は、諏訪地域における記憶の継承を理解する上で決定的に重要な意味をもちます。本事業では、諏訪を拠点とする学際的な研究会「スワニミズム」周辺の人々との対話を通じて、「在野の学知」の可能性と課題について討論を行いました。地域の歴史と記憶は、共同体の中でどのように継承・更新・拡張されていくのでしょうか。本事業は、諏訪の信仰史をめぐる歴史的想像力に焦点を当て、社会的な記憶と忘却のメカニズムについて考察します。

インタビュアー 濱田明李

6 d/p,p/d
パフォーマンスとはなんだろうか。ドキュメントされたパフォーマンスがパフォーマンスすることとはできるだろうか。そもそもパフォーマンスをドキュメントすることは可能か。パフォーマンスとはなんだろうか。どうして問えるのだろうか。今回の展示ではドローイングをしたいと考えている。ドローイングはパフォーマンスだろうか。ドローイングはドキュメントだろうか。ドローイングはドローイングそのものなのか。ドローイングとペインティングの違いはなにか。ではペインティングはパフォーマンスだろうか。ドローイングはパフォーマンスだろうか。(違おうだろう)。なぜ違おうのだろう。何が違おうのだろう。筆を使ってドローイングをする場合、いつペインティングになるか。painting が painting になるのはいつか。

たくみちゃん

3 ほとぼりについて
パフォーマンスを通じて捉えたい現実の広がりやピントを合わせることでできる瞬間を探っている。ここには、不可逆でオープンエンドな身体と、タイピング、語り、記録によって、一度は受肉されなかった諏訪の記憶が原料として運び込まれている。焦点を定めるための初めのパフォーマンスは、黒曜石と運搬—物体と行為の関係から発想された。それは歴史的な文脈、想像によって補われたロマンの一つでもあり、自分の持っている文脈と、置かれた状況や時間をなんとかして近づけようとする行為でもあり、さらに同行者の中に新しく帯を渡すという意図もあった。再びこれをひねっていき、異なる環境と文脈によって濾過する。今あるパフォーマンスのボディのどこに新たに光を受けさせるかを考えることもと言える。

濱田明李

7 生と死の境界領域
人は生まれた時に死ぬことが確定する。生まれなければ死ぬことはない。死んだ瞬間に生きることが終わる。その現実から逃避し、恐怖に打ち勝つために人はありとあらゆる知恵を尽くす。その昔、人は生霊という身代わりを神に捧げることで死を逃がすようとしていたらしい。身代わりとなり死を迎えた生き物たちはどのように生涯を終えて死を迎えたのだろうか。死を受け入れることとはとても難儀なことで、実際には死んでいく瞬間でさえも生きようとしている人は少なくないはずだ。生きる、生きたい、と思えば思うほどに死を意識してしまう。生と死は連続性を持つ。故にその間にある人生をかけがえのないものにしていく。自分にとってパフォーマンスをするということは、生きる、生きているということに特別な非日常を与えてくれる。「日々意識している死への旅路の中でも、今回は、死の境界領域を意識しながらパフォーマンスしてみたいと思う。

武谷大介

ARTIST



村田峰紀
MINEKI
MURAJITA



前田穰
YUZURU
MAEDA



たくみちゃん
TAKUMICHAHN



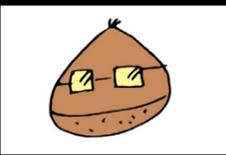
濱田明李
MIRI
HAMADA



武谷大介
TAKEYA
DAISUKE



瀬藤朋
TOMO
SETO



渋谷まろん
MARRON
SHIBUKAWA



牧田義也
YOSHIDA
MAKITA

1979年群馬県生まれ。2005年多摩美術大学美術学部彫刻学科卒業。原初的な身体所作で強いインパクトを与えるドローイングパフォーマンスやその結果として産み出されるインスタレーション、映像等を発表している。個展に、2015年「生PUNK」GALLERY HASHIMOTO (東京)、2014年「ネットワークライブ」ArtCenterOngoing、グループ展に、2015年「TWO STICKS」ヴロツワフ建築美術館 (ヴロツワフ)、「VOCA展 2015」上野の森美術館(東京)。ライブパフォーマンス、2015年「村田峰紀」THE WINDOW (パリ)、2014年「looking closely at things」LATENT SPACE (シンガポール)。

2009年 LaSalle Collage of the Arts, Singapore の音楽 / 作曲科を卒業。2010年よりゼンタイアートプロジェクトとしてゼンタイをテーマにした音楽ビデオ制作、パフォーマンスアート、音楽パフォーマンスをアジア各国で行う。また、2014年よりゼンタイアートフェスティバルを企画し、シンガポールで3つの展覧会とパフォーマンスイベントを主催。2017年よりパフォーマンスアートイベント「Performance Resource Orchestrator」をシンガポールにて毎年企画開催。近年のパフォーマンスに、Back Art Performance Art Biennale (バンクラデッシュ)、Asian Art Biennale (バンクラデッシュ)、2017 Artregems International Performance Art Festival (台湾)、Sound art network (シンガポール) など。

分断のない世界をつくりたい。その過程で独自のインプロヴィゼーションを構築する。パフォーマンスアート・美術・演劇など領域横断的に活動し、2018年より自身が審査員を務め優勝を決めるコンペティション「たくみちゃん杯」を主催する。身体表現メソッドを他者と交換可能にする試みとして、ワークショップの活動も積極的に行う。近年の主な発表 [faust] 発表 stilllive ゲーテ・インスティテュート東京 [- (dash)] 作・演出・出演 Contrail TPAM フリンジ参加作品 以上 2021年 [オフィスマウンテン 「アながあくほど」フルボディVer] 出演 ST スポット [MOVE-MOV (I) EMEN-MENT!!!!] 演出・出演 (Aokid x takumichan) として 豊岡演劇祭フリンジプログラム 兵庫県豊岡市竹野浜 [都庁前] 演出・出演 SCOOL [第3回たくみちゃん杯] 企画 FL田SH・オンライン配信 以上 2020年 [完全で検証可能かつ不可逆的な] 作・演出・出演 blanClass 以上 2019年 横浜ダンスコレクション 2016 審査員賞 (Aokid x 橋本匠) として

高知県南国市生まれのアーティスト。武蔵野美術大学油絵学科卒業。2012年よりNIPAFを通じて国内およびネパール、インド、ベトナム、バンクラデッシュなどのワークショップやフェスティバルに参加し、パフォーマンスアートの発表をする。また、他のアーティストと協働したイベントのオーガナイズも継続的に行なっている。2018年メキシコ政府奨学金を得てメキシコシティに渡航。パフォーマンスアートがより活況な地でのリサーチや、豊かなメキシコの文化に触れる。

カナダのトロント市と日本を拠点に活動する学際的アーティスト、キュレーター。現代社会の妥当性を検証するプロセスを通じて、その隠された二面性を作品として表現。スクールオブビジュアルアーツ卒 (米国)、ニューヨークアカデミーオブアート大学院卒 (米国)、ブロック大学教育学部成人教育課中退 (カナダ)。個展、グループ展多数。パフォーマンスアートでは、Flow (2021/米国)、Black KIT 40th (2021/ドイツ)、ECHT JETZT 国際行為芸術祭 (2019/ドイツ)、Above the Clouds 国際行為芸術祭 (2019/中国)、カトマンズ国際行為芸術祭 (2019/ネパール)、New Zero Festival (2018/ミャンマー)、undisclosed territory #11 (2018/インドネシア)、Crossing Border 国際メディア芸術祭 (2017/香港)、UP-ON 国際パフォーマンスアート芸術祭 (2017/中国)、重慶長江現代美術館 (2016/中国)、NIPAF (2016/日本) など。遠足プロジェクト及び遠足プロジェクトアジア代表 / キュレーター。トロントの現代ギャラリー元ディレクター。Responding: International Performance Art Festival and Meeting 代表。著書に『こどもの絵』(一草書房、2005年)。

京都芸術センターアートコーディネーター。大阪大学文学研究科在学中。インドのパフォーマンスアートの実践について修論を執筆中。

批評家。『LOCUST』編集部。京都演劇ガイドブック『とまる。』(2008-2012年)を創刊・発行。「チェルフィッチュ (ズ) の系譜学——新しい〈群れ〉について」(『ゲンロン9』2018年10月号)でゲンロン佐々木敦批評再生塾第三期最優秀賞を受賞。論考に「わたしたち」の健忘症。あるいはエクソフォニーが「開く(夢の脈絡)」(『多和田葉子 / ハイナ・ミユラー 演劇表象の現場』、東京外国語大学出版会、2020年)、「観 (光) 客はいかにして場違いな〇に犯されるか——したための「文字移植」を / から再読する」(『多和田葉子の演劇』を読む——切り拓かれる未踏の地平、論創社、2020年)、「ポストシアターの加速——COVID-19にF/Tはいかに応答したか」(『悲劇喜劇』2021年1月号) 等がある。

歴史家。上武大学講師。一橋大学大学院社会学部研究科博士後期課程単位取得退学、日本学術振興会特別研究員、立命館大学政策科学部助教を経て、現職。人・制度・思想の国境を越えたつながりに着目したグローバルヒストリーの視点から、人道支援事業の歴史を研究。近年は歴史遺産や文化財の調査を進め、歴史と記憶をめぐる現代社会の政治力学について考察。主要論文に「広域圏・国際連関・越境空間」『歴史評論』792号 (2016年)。